

細谷良夫氏寄贈細矢（細谷）家傳來和漢書目錄稿

會 谷 佳 光

本目錄は、二〇一七年五月、公益財団法人東洋文庫研究員の細谷良夫氏よりご寄贈いただいた細矢（細谷）家傳來の和漢書の解題目錄である。

細矢（細谷）家は、出羽守兼源修理大夫斯波兼頼を遠祖とし、その後裔細矢孫左衛門良俊が初代である。良俊は出羽國の戰國大名最上氏に仕え、弓矢に長じていたことから「矢氏」と稱され、謙遜して「細矢」と名乗ったといい、元和八年（一六二二）に最上家の改易に伴って致仕し、山形市閒横町に居を構えた。二代甚三郎は酒造業を営んだが、その没後、子の玄澤（醫業の祖）が醫道を志し、以後、瑞仙（醫業二世）、良禱（醫業三世）、良禱の三男で京都細矢家を興した東安、良珉（醫業四世）、元泰（醫業五世）、玄俊（醫業六世）、良珉（醫業七世）、千春（醫業八世）、眞金（醫業九世）と、九代二百年餘にわたって醫業を生業とした。元泰・玄俊は山形藩主秋元家の御用醫を勤め、東安は京都で御室仁和寺宮の侍醫となり、醫業四世良珉の三男元琳は十日町細矢家を興し、やはり醫業に従事した。明治に入ると、醫業七世良珉は、姓を「細谷」に改めその醫業を繼承したが、眞金の急逝により細矢（細谷）家の醫業は幕を閉じた。¹ 細谷良夫氏は第十三代當主であり、東北學院大學にて長年教鞭を執られ（現在、同大學名譽教授）、東

洋文庫では東北アジア研究班に所屬して滿洲族史・清朝史の研究にご活躍されている。

細谷家に傳わる藏書・文物のうち、明治初期の顯微鏡等醫學關係の文物二十點と醫學書等の書籍五十七部七十一冊は、一九九三年十月に一關市博物館に寄贈され、それ以外の文書六百二十二部（うち近世史料四百八十八部、近代史料百三十五部）は東北學院大學東北文化研究所に寄贈された。⁽²⁾ 醫業六世玄俊が在京中の文化十一年（一八一四）に仁和寺で書寫したと推測される『大明地理之圖』四軸は、二〇一四年七月に東洋文庫にご寄贈いただいた。今回ご寄贈いただいたのは、江戸時代に藩校などで用いられた經書・史書・小學（字書・韻書）の類で、いずれも江戸時代の寫本・刊本である。闕冊が多く、完本は少ないため、もとより細矢家の藏書の全體像を知るには必ずしも十分ではないが、細矢家が當時の知識人に必須の漢學の素養を子弟に身に附けさせるために代々使用していたものと推測され、醫業六世玄俊直筆の『書經』・『左氏傳』の注釋書が含まれるなど、細矢家の醫業を支える根幹を知る上で貴重な資料と考えられる。

注

- (1) 以上、細矢（細谷）家とその文書の概要については、榎森進・鈴木幸彦「山形横町細谷家文書―解題と目録―」（『東北學院大學東北文化研究所紀要』三十號、一九九八年八月）、細谷良夫「『大明地理之圖』を模寫した細矢玄俊と細矢（細谷）家」（『アジア學の寶庫、東洋文庫―東洋學の史料と研究』、勉誠出版、二〇一五年三月）、山口博之「出羽國山形城下・細矢家の陶磁器」（『日中韓周緣域の宗教文化』Ⅲ、東北學院大學アジア流域文化研究所、二〇一七年三月）を参照した。

- (2) 細谷良夫氏よりいただいたPDFファイル「細谷家寄贈資料目録 一關市博物館」に詳しい。本PDFファイルは「細谷家寄贈モノ資料」「細谷家寄贈資料 書籍(1) 和本 醫學」「同(2) 和本 雜」「同(3) 洋裝本」からなる。
- (3) 榎森進・鈴木幸彦「山形横町細谷家文書―解題と目録―」(前掲)を参照。

凡 例

一、本目録は、細谷良夫氏が東洋文庫に寄贈された細矢(細谷)家傳來の和漢書全二十八部四百七十卷二百四冊(巻数は附録を除く)の解題目録である。

一、漢籍・準漢籍・和書の部冊数は、次の通りである

漢 籍 十七部四百十卷百五十三冊

準漢籍 一部三卷三冊

和 書 十部五十七卷四十八冊

一、同一項目内における排列順序は、基本的に刊行・書寫の年代順とした。

一、表記は、ユニコードで表記可能な範圍で舊字體を用いた。

一、書誌事項は、書名・卷數、編著者名、出版事項、冊數、版式、内容構成、版心題、刊記、奥附、題簽題、印記(藏書印)、書入、その他特記事項からなり、補足・推定にかかわる部分は「〔 〕」附きで記した。

一、書名は、原則として第一巻の巻頭書名によつた。第一巻に巻頭書名がない場合や、巻によつて異なる場合等は、適宜、目録題・末題・版心題等に従つた。

一、改行は「／」で表し、小字で記されるものは、「へ」付きで記した。また、例えば「書林」と中央にあつてその下に書肆が改行して列擧されるような場合は、「書林 一／／二」のように記した。

一、書誌事項の後に、著者、書物の内容、出版・書寫の経緯、流傳の状況、舊藏者等について、参考までに簡略な解題を附した。

一、「【】」内の二桁の数字(01~28)は、便宜的に與えた整理番號である。請求記號は後日圖書部による整理を俟つて附されることとなる。

(一) 漢 籍

1 經部

a 書類

〔首書〕書經六卷 闕卷第一 宋蔡沈集傳 日本松永昌易首書 江戸期刊享保九年京都今村八兵衛印本 五經集註之一 五冊【01】

單邊縱二十四・三 cm 横十六・九 cm (本文縱十八・五 cm 横十三・七 cm。いずれも卷之二第一丁表による) 有界八行十七字注文小字雙行 (本文による。鼈頭部行三十四字) 單白魚尾上白口下小白口 (小黑口の白抜き) 句送返縦點首「書經卷之二 蔡沉集傳／夏書〈…〉、以下至卷之六、次寸雲子昌易 (松永昌易) 〔記〕。版心題「書經」又卷次・丁次あり。刊記「享保九〈甲／辰〉年正月吉辰／二條通柳馬場西〈江〉入町／今村八兵衛板」(〔記〕後。埋木)。題簽題「〈首／書〉書經集註」。印記「□細谷」朱文圓印。墨筆書入あり。

江戸時代前期の儒者松永昌易 (一六一九～一六八〇。號寸雲) が、宋の蔡沈『書經集傳』を本文として、鼈頭部に元の陳師凱『書蔡傳旁通』、元の鄒季友『書傳音釋』等を注記したもの。松永昌易首書『五經集註』の一つ。細矢家本は第一冊を闕くが、國文學研究資料館所藏 (鵜飼文庫。http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_200020940) の同版本では、卷首に嘉定己巳 (二年、一二〇九) 蔡沈「書經集傳序」、「書經篇目」、「書經卷之一 蔡沉集傳／虞書〈…〉

がある。また、享保九年（一七二四）の刊記が埋め木のため、これより以前に別の書肆によって開版された版本を今村八兵衛が入手して享保九年に印行したものである。これとは別版の享和元年（一八〇一）京都今村八兵衛重刊本（東洋文庫蔵 J380）の刊記に「寛文四（甲／辰）曆九月吉日／享和元年／辛酉曆九日」再校今村八兵衛蔵板」とあり、かつ「享和元年」以下が埋め木であるのによれば、兩版に先んずる版本として寛文四年（一六六四）刊本があつたことがわかる。つまり、今村八兵衛は寛文四年刊本の重刊本の版本を入手して後印したのち、そのオリジナルである寛文四年刊本の版本を入手して校正のうえ享和元年に印行していたものと推測される。細矢家本は、前者に該当する。また、後述の〔首書〕詩經・禮記集說・春秋四傳と表紙・題簽・料紙が酷似していることから、書經・詩經・禮記集說・春秋四傳の四部、あるいはこれに周易を加えて、もともと一具の『五經集註』として所藏していたと考えられる。

書經殘三卷 存卷第一至第三 日本〔細矢玄俊〕注 江戸期鈔本 一冊【02】

無邊縱二十五・〇cm 横十七・二cm（書型による） 無界七行十七字 送返點

首〔古文尙書序〕題字の注釋、次孔安國「古文尙書序」、次嘉定己巳（二年、一二〇九）蔡沈「書經集傳序」、次「書經卷之一／虞書／〇堯典」、以下至卷之三。印記「惟／直」白文方印、「字／伯溫」朱文方印。表紙に「書經（敬壽堂藏書）一二參」、書背に「共三」とそれぞれ墨筆書入あり。裏見返しに「細矢敬義堂源惟直藏書」墨筆識語あり。

本書は、『古文尚書』虞書（卷之一）・夏書（卷之二）・商書（卷之三）の本文の餘白に漢字假名まじりの注釋を書き込んだもので、書背に「共三」とあることから、第二・三冊が周書であったと見られる。餘白以外にも注釋等を書き込んだ別紙片が三箇所に挿入・貼附される。醫業六世玄俊（名惟直、字伯溫、號敬義堂）の舊藏書で、同じく玄俊の舊藏書で「講釋」（注釋）を書き込んだ『春秋經傳集解』と同體裁・同筆跡であることから、『書經』も玄俊の直筆と考えられる。この兩書は玄俊の學識ひいては細矢家の家學の有り様を知る上で貴重な資料といえる。

b 詩類

〔首書〕詩經八卷 闕卷第六至第八 宋朱熹集傳 日本〔松永昌易〕首書 〔享保九年京都今村八兵衛〕刊本 五經集註之一 三冊【03】

單邊縱二十三・七cm横十七・〇cm（本文縱十八・〇cm横十三・六cm） 無界八行十七字注文小字雙行（本文による）。
鼈頭部行三十四字） 單白魚尾上白口下小白口（小黑口の白抜き） 句送返縱點

首淳熙四年（一一七七）朱熹「詩經集傳序」、次「詩經篇目」、次「詩經卷之一 朱熹集傳／國風一（一）」、以下至卷之五。版心題「詩經」又卷次・丁次あり。題簽題「（首／書）詩經集註」。印記「□細谷」朱文圓印。書入なし。

本書は、松永昌易が同志後學のために、教授の暇に、宋の朱熹『詩經集傳』を本文として、元明諸儒の説を採集して鼈頭部に注記したもの。松永昌易首書『五經集註』の一つ。細矢家本は、國立國會圖書館所藏の享保九年京都今村八兵衛刊本と同版（<http://dlndl.go.jp/info:ndljp/pid/2559611>）である。國立國會圖書館藏本には、卷之八の

後に講習堂寸雲子昌易〔書〕、刊記「享保九〔甲／辰〕年（一七二四）正月吉辰／二條通柳馬場西〔江〕入町／今村八兵衛板」〔書〕後がある。その刊記は〔首書〕書經とは異なり、埋め木には見えないが、確定するためには、埋め木前の同版本、あるいは埋め木を確認しうる同版の後印本がないかを調査する必要がある。なお、今村八兵衛は寛政三年（一七九一）に寛文四年（一六六四）版をもとに鈴木溫の校正を経た版を重刊している。

詩經集註十五卷 闕卷第一第二第七至第十三 宋朱熹撰 江戸期刊本 三冊【04】

單邊縦二十・七cm横十四・一cm（卷第三第一丁表による） 無界六行十六字注文小字雙行低一格十九字 雙魚尾（下白魚尾（下向）白口 句送返縦點

首「詩經集註卷之三／鄒一之四／∴」、以下至卷第六第十四第十五。版心題「詩經集註」又卷次・丁次あり。題簽題「詩經集註」又内容細目を印刷した方形題簽を表紙中央に貼附す。無刊記。印記「□細谷」朱文圓印。朱墨筆書入あり。卷第六第十三～十四丁間に「横町□□□□／細矢良珉」と墨書した小紙片と、「元民」なる人物が良珉宛に書した紙片が挿入される。

本書は、宋の朱熹による『詩經』の注釋書である。細矢家本は、早稻田大學圖書館藏本（闕卷第三第四。イ17、02071。http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i17/i17_02071/index.html）と同版であり、國立公文書館内閣文庫藏本（存卷第三至第六。https://www.digitalarchives.go.jp/das/meta/M2015072411021560542）とは同版式の別版である。早稻田大學圖書館藏本には、卷首に「詩經集註目錄」、淳熙四年（一一七七）朱熹「詩經集註序」、

「詩經集註卷之一／國風一／…」がある。

c 禮類

〔首書〕禮記集說三十卷 元陳澧撰 日本松永昌易首書 享保九年京都今村八兵衛刊本 五經集註之一 全十五冊

【05】

單邊縱二十三・八cm横十七・二cm（本文縱十八・三cm横十四・二cm）有界八行十七字注文小字雙行（本文による）。
鼈頭部行三十四字 單白魚尾上白口下小白口（小黑口の白抜き） 句送返縱點

首陳澧「禮記集說序」、次「禮記篇目」、次「禮記集說卷之一／曲禮上第一〈…〉、以下至卷之三十、次春秋館教授昌易〔記〕。版心題「禮記」又卷次・丁次あり。刊記「享保九〔甲／辰〕年正月吉辰／二條通柳馬場西〔江〕入町／今村八兵衛板」〔記〕後。題簽題「〔首／書〕禮記集註」。無印。朱墨筆書入あり。

本書は、松永昌易が初學者のために、元の陳澧『禮記集說』を本文として、唐の孔穎達『禮記正義』・明の柯尚遷『曲禮全經附傳』の説を採集して鼈頭部に注記したもの。松永昌易首書『五經集註』の一つ。細矢家本は、國立國會圖書館所藏の享保九年（一七二四）京都今村八兵衛刊本と同版（<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2576525>）であり、いずれも刊記は埋め木に見えないが、今後繼續調査が必要である。

d 春秋類

春秋經傳集解三十卷 闕卷第二第二第十一至第十六 晉杜預撰 江戸期據慶長中古活字印本刊 十一冊【06】
 雙邊縱十九・四 cm 横十六・二 cm (卷第三第二丁表による) 有界八行十七字注文小字雙行 雙花魚尾小黑口 送返
 縦點

首「春秋經傳集解莊公第三／杜氏 盡三十二年／…」、以下至哀下第三十。版心題「左氏」又卷次・丁次あり。無
 刊記。題簽題「春秋左氏傳」(書貼)。第一・六冊闕。印記「度／外」朱文方印。第三冊裏表紙に「細矢藏書」墨筆
 書入あり。朱墨筆書入あり。茶不審紙の貼附あり。卷第六第二十三至二十四丁間に墨筆書入をした紙片を挿入する。
 本書は、晉の杜預が『春秋』の經文と『左氏傳』とを一つに合わせて注解を施したものである。細矢家本は、慶
 長中(一五九六―一六一五)古活字印本(國立公文書館内閣文庫等藏。https://www.digitalarchives.go.jp/das/
 meta/M2015073110015863152)に訓點を附して覆刻したものであり、藏書印から醫業七世良珉の舊藏書であるこ
 とがわかる。第一・六冊の二冊を闕くが、慶長中古活字印本の卷首には「春秋序」「春秋經傳集解隱公第一／杜氏
 盡十一年／…」がある。

〔首書〕春秋四傳三十八卷春秋集註綱領一卷春秋提要一卷春秋諸國興廢說一卷 □闕名輯 日本松永昌易首書 〔寛文
 四年野田庄右衛門〕刊享保九年京都今村八兵衛印本 五經集註之一 全十冊【07】
 單邊縱二十四・三 cm 横十七・五 cm (本文縱十八・五 cm 横十四・四 cm) 有界九行十七字注文小字雙行(本文による)。
 鼈頭部行三十四字) 單白魚尾上白口下小白口(小黑口の白抜き) 句送返縦點

首「春秋序／胡氏傳序」、次「左氏傳序 杜預著／…」、次「公羊傳序 何休著／…」、次「穀梁傳序 范甯著／…」、次崇寧二年（一一〇三）程頤「附錄程子傳序」、次「春秋集註綱領」、次「春秋提要」、次「春秋諸國興廢說」、次「春秋經傳總目」、次「春秋四傳卷之一／隱公一（…）」、以下至卷之三十八、次春煠館教授昌易〔書〕。版心題「春秋」又卷次・丁次あり。刊記「享保九（甲／辰）年正月吉辰／二條通柳馬場西（江）入町／今村八兵衛板」（〔書〕後）。題簽題「〈首／書〉春秋集註」。無印。朱筆書入あり。青不審紙の貼附あり。

本書は、松永昌易が胡氏傳を本注として、公羊・穀梁・左氏の三傳を附注とし、さらに胡氏傳は陳哲、公羊傳は何休、穀梁傳は范寧、左氏傳は林唐翁の説で引證して鼈頭部に注記したもの。松永昌易首書『五經集註』の一つ。なお、奈良女子大學學術情報センター所藏の寛文四年野田庄右衛門刊本 (http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_100239453) には、刊記「寛文四（甲／辰）曆九月吉日／野田庄右衛門開板」（〔書〕後）がある。細矢家本の刊記は、一見すると埋め木に見えないが、版本の状態を比較すると、奈良女子大學學術情報センター藏本と同版の後印本であり、享保九年の刊記が實は埋め木であつたことがわかる。

音註全文春秋括例始末左傳句讀直解七十卷首一卷附左傳評林七十卷 闕卷第五十七至第六十 宋林堯叟撰 明凌稚隆原本 日本奥田元繼句讀併補頭注 寛政五年大坂書林松村九兵衛等刊本 十四冊【08】

左右雙邊縱二十二・七 cm 横十四・九 cm（本文縱十八・六 cm） 有界十行二十字注文小字雙行（上欄左傳評林二十行七字） 雙魚尾（下白魚尾（下向）） 白口 句送返縱點 傍點

首萬曆戊子（十六年、一五八八）凌稚隆「春秋左傳評林測義／明吳興後學凌稚隆輯校／…」（印刷印記「稚／隆」、
「以棟／父」、「天目／逸史」）、次「春秋左氏傳序／晉杜元凱序／宋林唐翁解、…」又上欄に「左傳評林／清古榕方
廷珪／伯海父評點／日本播州奥田元繼／志季父輯校」とあり、次元繼「左傳評林序」（版心。印刷印記「拙古／主
人」「元繼／之印」、次「音註全文春秋括例始末左傳句讀直解卷之一／梅谿林堯叟唐翁／魯隱公一／…」又上欄
に「左傳評林／明吳興凌稚隆／以棟父原本／日本播州奥田元繼／志季父輯著」とあり、以下至卷之七十、次寛政五
年（一七九三）奥田元繼「識語」（印刷印記「奥田／元繼」「志／季」。第十三冊闕。見返「寛政癸丑發兌」又「明
吳興凌稚隆原本／春秋左氏傳／評林〈有文堂藏／翻刻必究〉／日本西播奥田元繼輯著」。版心題「左傳評林」又卷
次・丁次あり、版心下部に「奥田元繼句讀」とあり。奥附「寛政五（癸／丑）年九月／大坂書林〔松村九兵衛／葛
城長兵衛／柳原喜兵衛／志多森善兵衛〕」。題簽題「春秋左氏傳評林〈林註〉」。印記「隨朝□／圖書信」朱文長方印、
「□細谷」朱文圓印、「大門通小傳馬三丁目／中屋幸三郎藏書記」朱文長方印、「中屋藏書」朱文長方印、「度外」朱
文小長方印（朱筆書入をした小紙片に捺印）。朱墨筆書入をした小紙片の貼附あり。茶不審紙の
貼附あり。

本書は、江戸時代中後期の儒者奥田尚齋（一七二九～一八〇七、名元繼、字志季、別號松齋・拙古・仙樓）が、
宋の林堯叟の左傳注釋書『音註全文春秋括例始末左傳句讀直解』の上欄外に、明の凌稚隆（生卒年不詳、字以棟、
號磊泉。他に『漢書評林』等の著あり）『左傳評林』を冠し、さらに句讀と補注を施したもので、寛政五年に大坂
の書肆松村九兵衛等によって刊行された。小紙片に捺印された印記から醫業七世良珉の舊藏書であつたと推測され

る。

春秋經傳集解殘十一卷 存第二至第十一 晉杜預撰 日本細矢玄俊注 文化十一年十二年自筆鈔本 十一冊【09】

無邊縱二十五・〇cm横十七・五cm（書型による） 無界五行十七字集解小字雙行 送返縦點

首杜預「春秋左氏傳序」（題字の注釋）、次杜預「春秋經傳集解後序」、次「春秋經」「傳」「集解」「隱公」（注釋）、次「春秋經傳集解隱公第一／杜氏 盡十一年／：」、以下至宣下第十一。印記「惟／直」白文方印、「字／伯溫」朱文方印、「跂及」朱文長方印。第一冊表紙に「左氏傳（隱公）」又「敬義堂藏書」墨筆書入あり。第一冊裏表紙に「講釋 文化十二（甲）戌十月十一日始／同年臘月十三日終／細矢惟直藏書」、第二冊末丁に「講釋 文化十二（乙）亥正月廿二日始／二月廿日終／細矢惟直藏書」、第三冊裏見返に「講釋 文化十二（乙）亥四月十七日／始同二十二日終／細矢惟直藏書」、第五日終／細矢惟直藏書」、第四冊裏見返に「講釋 文化十二（乙）亥四月廿五日／始八月十二日終／細矢惟直藏書」、第五冊裏表紙に「講釋 文化十二（乙）亥四月廿五日／始八月十二日終／細矢惟直藏書」、第六冊末丁に「講釋 文化十二（乙）亥八月十二日始／九月五日終／細矢惟直藏書」、第七冊末丁に「講釋 文化十二（乙）亥十月五日始同／廿五日終／細矢惟直藏書」、第九冊末丁に「講譯 文化十二（乙）亥十月廿七日／始十一月廿五日畢／細矢惟直藏書」、第十冊末丁に「講譯 文化十二（乙）亥歲霜月二十七日／始（極月十三日畢）／細矢惟直藏書」墨筆書入あり。

本書は、晉の杜預『春秋經傳集解』（春秋左氏傳）の注釋書のうち隱公・桓公・莊公・閔公各一卷、僖公上中

下三卷、文公・宣公各上下二卷の計十一卷に對し、醫業六世玄俊が、文化十一年（一八一四）十月十一日から翌年十二月十三日にかけて、本文の餘白に漢字假名まじりの「講釋」（注釋）を書き込んだもので、その他、注釋等を書き込んだ別紙片が複數箇所に入挿・貼附される。時期的には、玄俊が京都細矢家東安の跡を繼いで御室仁和寺宮の侍醫となり、『大明地理之圖』（東洋文庫藏）を模寫した時に當たる。「桓公」の「桓」字（北宋欽宗趙桓の諱）の末筆を闕く。なお、成公・襄公・昭公・定公・哀公に該當する部分はない。

e 四書類

鼈頭四書大全三種 闕大學章句大全一卷中庸或問一卷中庸章句大全一卷孟子集註大全卷第十三第十四 明胡廣等奉勅撰 日本〔熊谷立閑〕標注〔元祿四年京都書肆〕刊本 十七冊【10】

中庸或問一卷 全一冊

單邊縱二十三・七cm横十七・五cm（本文雙邊縱十七・七cm横十四・二cm） 無界八行二十一字（各段第二行以降低一格二十字） 無魚尾上白口下小黑口 句送返縱四聲點

首「中庸或問／或問」；末題作「中庸或問大全（終）」。版心題「中庸大全」又「或問」又丁次あり。無刊記。題簽題「鼈頭／新增」中庸或問大全。無印。書入なし。鼈頭部に評注なし。

論語集註大全二十卷 全十冊

單邊縱二十五・一cm横十七・五cm（本文縱十八・一cm横十四・二cm） 無界八行二十一字（集註低一格二十字、

鼈頭部二十二行三十七字）注文小字雙行 單魚尾上白口下小黑口 句送返縱四聲點 傍注 鼈頭部有圖
首「論語集註序說」、次「讀論語孟子法」〈…〉、次「論語集註大全卷之一」〈通考…〉／學而第一／…、以下至卷
之二十。版心題「鼈頭四書大全」又「論語」又卷次・丁次あり。無刊記。題簽題「鼈頭／新増」論語集註大全」。
無印。不審紙の貼附あり。書人なし。卷之一第五十丁を誤って第五十四丁の後に綴じる。

孟子集註大全十四卷 闕卷第十三第十四 六册

單邊縱二十五・二cm横十七・五cm（本文縱十八・二cm横十四・三cm） 無界八行二十一字（集註低一格二十字、
鼈頭部二十二行三十七字） 注文小字雙行 單魚尾上白口下小黑口 句送返縱四聲點 傍注 鼈頭部有圖
首「孟子集註序說」、次「孟子集註大全卷之一」／梁惠王章句上／凡七章〈…〉、以下至卷之十二。版心題「鼈頭四
書大全」又「孟子」又卷次・丁次あり。無刊記。題簽題「鼈頭／新増」孟子集註大全」。無印。不審紙の貼附あ
り。朱筆書入あり。第四册首に字義について記した小紙片を挿入し、同册末に橙絲欄原稿用紙（版心下部「崑崙
堂梓」）に「荅書」と題する書信一枚と「大國」「次國」「小國」に關する定義を記した紙片一枚を挿入する。

『四書大全』は、永樂十三年（一四一五）、胡廣等が勅を奉じて「四書」（『論語』・『孟子』・『大學』・『中庸』）の
正文と朱熹の注に關する宋元代の儒者の學説を集成して天下に頒布したもので、以後、科擧における解釋の基準と
された。『大學章句大全』一卷・『大學或問』一卷・『中庸章句大全』一卷・『中庸或問』一卷・『論語集註大全』二
十卷・『孟子集註大全』十四卷からなり、『欽定四庫全書總目』經部三十六四書類二には「四書大全三十六卷 通行
本」と著録される。日本では寛永十二年（一六三五）に僧自乾の訓點を附して京都で刊行されて以降、數種の版を

数えた（東條琴臺『先哲叢談續編』（千鍾房、明治十七年一月）卷一第三十丁参照）。本書もその一つであるが、細矢家本は『大學章句大全』・『大學或問』・『中庸章句大全』・『孟子集註大全』卷第十三第十四および序跋・刊記を闕き、刊年等を知る手がかりはない。しかしながら東京大學東洋文化研究所所蔵の元祿四年刊本『論語集註大全』卷第一卷首、『中庸或問』卷首と版式・版面の状態が一致することから（<http://www3.ioc.u-tokyo.ac.jp/user/index.php>）。ただし同研究所の『孟子集註大全』卷第一卷首の畫像は版心題を「孟子大全」に作り、他の『四書大全』本が混入したものと見られる）、細矢家本は元祿四年刊本であると推定される。元祿四年刊本は國立公文書館内閣文庫（昌平坂學問所本）にも所藏され、同館デジタルアーカイブ（<http://www.digitalarchives.go.jp/>）の全文畫像によれば、『大學章句大全』の冊には封面「徐九一太史訂正／四書大全／金閨五雲居藏版」、永樂十三年「御製性理四書大全序」、永樂十三年胡廣等「進書表」、「讀大學法」、「四書集註大全凡例」、宣德二年（一四二七）楊榮（後序）（版心）があり、『孟子集註大全』卷第十四の次に元祿辛未（四年、一六九一）熊谷立閑（？）一六九五。江戸時代前期の儒者。字荔墩、號荔齋・了庵）（『四書大全跋』）と刊記「元祿四年（辛／未）九月日 洛陽書肆藏版」（跋末）がある。なお、内閣文庫藏本の『中庸或問』は細矢家本と別版、『論語集註大全』・『孟子集註大全』は同版で細矢家本が後印である。

四書集註 闕大學一卷中庸一卷論語卷第一至第七孟子卷第三至第六 宋朱熹集註 享保十四年京都北村四郎兵衛刊本

論語十卷 闕卷第一至第七 一冊

單邊縱二十一・一 cm 横十五・九 cm 有界九行十五字注文小字雙行低一格二十一字 單白魚尾小黑口 句送返縱四聲點

首「論語卷之八／朱熹集註／衛靈公第十五（凡四十／一章）／…」、以下至卷之十。版心題「論語」又卷次・丁次あり、卷第八至第十を「卷四」とする。無刊記。印記「細眞」朱文圓印、判讀不明小方印（朱文・白文各一箇）、「高」「山」白文圓印。表紙に「論語 四」、裏表紙見返に「細矢」、裏表紙に「本家」「細矢／藏書」とそれぞれ墨筆書入あり。墨筆抹消線あり。朱墨筆書入あり。墨筆書入をした小紙片の貼附あり。朱不審紙の貼附あり。

孟子十四卷 闕卷第三至第六 三冊

單邊縱二十・七 cm 横十六・〇 cm 有界九行十五字注文小字雙行低一格二十一字 單白魚尾小黑口 句送返縱四聲點

首「孟子／朱熹集註序説／…」、次「孟子卷之一／朱熹集註／梁惠王章句上（凡七／章）／…」、以下卷之二卷之七至十四。版心題「孟子」又卷次・丁次あり、卷第一第二を「卷一」、卷第七至第十を「卷三」、卷第十一至第十四を「卷四」とする。刊記「享保十四年（己／酉）孟春吉日／京五條橋通鹽竈町／北村四郎兵衛（開／版）」（卷之十四末）。印記「細矢藏書」墨文無梓長方印。第一冊表紙に「孟子 壹」、裏表紙見返に「細矢藏□」、裏表紙に「横町／細矢／藏書」、第三冊表紙に「細谷」（「谷」字を繰り返す）、裏表紙に「横町／敬義堂」、第四冊裏表紙に「敬義堂／細谷藏書」とそれぞれ墨筆書入あり。朱墨筆書入あり。不審紙（茶・朱）の貼附あり。

本書は、宋の朱熹『四書集註』四種の零本であり、細矢家本は、全十冊中、第六冊論語卷四（卷第八至第十）、第七・九・十冊孟子卷一・三・四（卷第一第二第七至第十四）を存す。『四書集註』は明治に至るまで数多くの版が刊行されたが、細矢家本は享保十四年（二七二九）に京都の北村四郎兵衛によって刊行されたものである。「細真」印は、醫業九世眞金の藏書印と推測される。

f 小學類

詩韻珠璣五卷 闕卷第一上 清余照輯 日本東條信耕校訂 天保二年大阪河内屋茂兵衛等刊本 七冊【12】

左右雙邊縱十六・五cm横十一・一cm（卷之一第三十四丁表による） 有界（ママ無界） 十行十八字注文小字雙行三十六字 單魚尾白口 送返點

首「七虞／虞（…）」（卷之一第三十四丁表、次「詩韻珠璣卷二之上／江都余照春亭輯／下平／…」、以下至卷之五下、各冊末に「東條耕校訂」とあり、卷之五下第五十三丁裏に「琴臺東條先生校訂著述書目」あり。第一冊卷之一第三十三丁以前を闕く。第二冊卷之一第三十四至七十五丁、第三冊卷之二上第一至三十五丁、第四冊卷之二下第三十六至七十二丁、第五冊卷之三上第一至三十四丁卷之三下第三十五至六十六丁、第六冊卷之四上第一至三十一丁、第七冊卷之四下第三十二至七十一丁、第八冊卷之五上第一至二十四丁卷之五下第二十五至五十三丁。版心題「詩韻珠璣」又卷次・韻目・丁次を記す。奥附「（廣告）／天保二年辛卯冬發兌／書肆（江戶日本橋通二丁目）小林新兵衛／（京都二條通）風月庄左エ門／（尾州名古屋本町）永樂屋東四郎／（勢州津）山形屋傳右エ門／（大坂心齋橋

筋博勞町」河内屋茂兵衛」(第五冊末)、又「廣告二丁分」(廣告)／「天保二年辛卯六月／舊刻 發兌」(江戸日本橋通「リ」二丁目)／小林新兵衛／「大阪心齋橋筋博勞町」／河内屋茂兵衛藏版」(第八冊末)。題簽題「詩韻珠璣」。印記「鍍／鎧」朱文方印、判讀不明茶文橢圓印。書入なし。

本書は、清の余照(他に『頭字韻』五卷・『詩韻集成』十卷あり)が詩の押韻(「詩韻」)に用いる熟語のうち優れたもの(「珠璣」)を集めたものである。版本には東京大學東洋文化研究所所藏の嘉慶五年(一八〇〇)序刊本があり、和刻本には江戸時代・明治前期の儒者東條琴臺(一七九五～一八七八)が校訂して天保二年(一八三一)に大坂の河内屋茂兵衛が刊行したもの、明治十三年(一八八〇)に谷喬が増補して此村庄助等が刊行したものがある。細矢家本は、天保二年刊東條琴臺校訂本である。第一冊を闕ぐが、北海道大學附屬圖書館所藏の天保二年版(<https://kotensekinijl.ac.jp/biblio/100240461>)によれば、見返「天保辛卯新鐫／詩韻珠璣／浪華 羣玉堂版」、嘉慶五年余照「詩韻珠璣序」、「例言」、「詩韻珠璣目錄／清余照春亭輯」、東條耕「識語」、「詩韻珠璣卷一之上／江都余照春亭輯／上平聲／一東／東〈…〉からなる。

2 史部

a 正史類

史記評林一百三十卷首二卷補史記一卷 明凌稚隆輯校 明李光縉增補 寛文十二年京都八尾甚四郎友春刊延寶二年修本 全二十五冊【13】

單邊縱二十三・八cm横十六・七cm（本文縱十九・六cm）無界十二行十九字注文小字雙行（首書部行七字）單魚尾上白口下黑口（首書部黑口） 句送返縱四聲點 首書頭注傍注

首王世貞「史記評林叙」（印刷印記「元／美」「天啓／居士」、次萬曆四年（一五七六）茅坤「刻史記評林序」、次萬曆五年徐中行「史記評林序」、次「史記評林目錄」、次司馬貞「史記索隱序」、次司馬貞「史記正義論例」、次張守節「史記正義法解」、次張守節「史記正義列國分野」、次「三皇五帝譜系」他系圖二十三種・地理圖五種、次「史記評林凡例」、次凌稚隆（識語）、次李光縉（識語）、次「史記評林姓氏」、次「史記評林引用書目」、次「讀史總評」、次「附短長說上」、以下下、次「補史記（吳興凌稚隆輯校／溫陵李光縉增補）」／三皇本紀（…）、次「史記評林卷之一（吳興凌稚隆輯校／溫陵李光縉增補）」／五帝本紀第一（…）、以下至卷之一百三十。卷第八十六第十九丁の料紙は他丁より黄色味がかり、かつやや縦が小さい。版心題「史記」又卷次・篇名・丁次、まれに版心中部下方に原本刻工名・繕寫者名あり。刊記「寛文壬子年刊」（版心上部）「八尾友春」（版心下部）、又「延寶二甲寅曆仲夏吉辰／洛陽寺町通本能寺前／八尾甚四郎友春重刊」（卷第百三十末）。題簽題「〔新／版〕／〔考／正〕 史記評林」。印記「敬／義／堂」墨文方印、「細矢藏書」墨文長方印、「度／外」朱文方印。朱筆書入あり。朱不審紙の貼附あり。

本書は、明の凌稚隆が、劉宋の裴駰『史記集解』、唐の司馬貞『史記索隱』、唐の張守節『史記正義』をはじめ『史記』に關する注釋・評論を集成したもの。細矢家本は、刊記によれば、寛文十二年（一六七二）に京都の八尾甚四郎友春が刊行したものを、さらに延寶二年（一六七四）に「重刊」した（卷第百三十末）とある。なお一橋

大學等所藏の寛永十三年（一六三六）京都八尾助左衛門刊本は十行二十字の別版である（全國漢籍データベース <http://kanji.zinbunkyo-to-u.ac.jp/kanseki/detail>）に巻首・刊記のJ P E G画像あり）。醫業六世玄俊、七世良珉の藏書印を確認できる。

三國志六十五卷 闕魏書十七至十八蜀書十五卷吳書二十卷 晉陳壽撰 劉宋裴松之集註 明陳仁錫評閱 日本田中犀訓點 江戸期刊後印本 二十一冊【14】

單邊縱二十・九cm横十四・〇cm 有界（ママ無界）十行二十字 單魚尾白口 句送返縱點 頭注傍線傍注傍點
首天啓丙寅（六年、一六二六）陳仁錫「三國志序」（印刷印記「陳印／仁錫」「明卿」、次萬曆二十四年（一五九六）馮夢禎「敘重刻三國志」、次萬曆丙申（二十四年）黃汝良「重刻三國志小序」、又小序末に「吳門颺氏章欽」とあり、次寛文庚戌（十年、一六七〇）林叟「新刊三國志序」、次田犀一角「新刊三國志序」、次「晉書本傳」、次「節錄宋書裴松之傳」、次元嘉六年（四二九）裴松之「上三國志注表」、次晉陳壽「三國志目錄」、次「三國志／晉平陽侯相陳壽撰述／宋西鄉侯裴松之集註／明長洲陳仁錫評閱／魏／武帝紀第一／…」、以下至魏三十。第十四冊闕。魏書二第九・三十二・四十七丁闕、第四十・四十一丁錯丁。版心題「三國志」又「魏書」又卷次・篇名・丁次あり、ままだ版心下部に原本の刻工名・刻字數あり。題簽題「三國志（魏）」。無印。魏書二十五末に「野馬臺之詩」と題する書き込みのある小紙片を挿入す。朱不審紙の貼附あり。

本書は、陳仁錫（一五八一～一六三六。字明卿、號芝臺、天啓二年進士、官は南京國子監祭酒に至る）が評閱を

加えた晉の陳壽撰・劉宋の裴松之集註『三國志』に對して、林鶯峰（一六一八～一六八〇）の門人田中厚（一角・避塵齋）が訓點を加え、寛文十年に鶯峰の序を得て京都で刊行したもの。細矢家本は、京都大學人文科學研究所藏の寛文十年京都伏見屋植村藤右衛門秋田屋平左衛門刊本（全國漢籍データベースに卷首・刊記のJPE G畫像あり）と同版の後印本であるが、同所藏本の刊記「寛文拾曆（庚／戌）三月吉祥日／書肆「堀川通伏見屋／植村藤右衛門／京極通秋田屋山本平左衛門」板行」（呉書卷二十末）は埋め木である。早稻田大學圖書館藏の寛文十年刊本（<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>）は京都大學人文科學研究所とほぼ版面の状態が同じであるが、刊記の植村の部分が「二條通村上勘兵衛」に埋め換えられている。長澤規矩也「和刻本三國志解説」（『和刻本正史三國志（一）魏書（上）』（汲古書院、一九七二年十一月）所収）によれば、同氏所見の和刻本『三國志』の刊記は、いずれも書肆・刊行年月すべて埋め木であり、その中で早印のものは上述の寛文十年京都伏見屋植村藤右衛門秋田屋平左衛門と埋め木された印本であり、それに次ぐのが二條通村上勘兵衛と埋め木された印本とのことであり、さらに「浪華書林」「澁川清右衛門／松村九兵衛」と埋め木された印本などがあるという。長澤氏は最も早印の植村本も頭注が加刻であることから、他に初印本があると想定するが、頭注がない状態の印本は未見とのことである。

b 別史類

立齋先生標題解註音釋十八史略七卷 元曾先之撰 明陳殷音釋 明王逢點校 正保五年京都據正統六年書林余氏刊本
重刊 全四冊【15】

單邊縱二十一・一cm横十五・三cm（本文縱十九・二cm） 無界十二行二十二字注文小字雙行 雙花魚尾小黑口 送返縱點 頭注

首大德丁酉（元年、一二九七）周天驥〔史畧叙〕（末題）、次洪武壬子（五年、一三七二）陳殷〔史畧叙〕（版心）〔印刷印記〕「湖□／遺民」「□□／□家」「陳殷／□江」、次「立齋先生十八史畧目錄」、次「史畧音釋凡例」、次「立齋先生標題解註音釋十八史略卷之一／前進士廬陵曾先之編次／後學臨川陳殷音釋／番易松塙王逢點校／太古建陽縣丞南康何景春捐俸刊／」、以下至卷之七。版心題「史略」又卷次・丁次あり。原刊記（木記）「正統辛酉（六年、一四四二）孟夏／書林余氏新刊」（周天驥〔史畧叙〕丁裏）、刊記（木記）「正保戊子（五年、一六四八）三陽日／于土御門町梓行」（卷第七末）。題簽題「十八史略」。印記「度外」朱文圓印。朱墨筆書入あり。語句の和訓やメモ等を書き込んだ紙片三枚（版心下部に「敬義堂藏書」と印字された原稿用紙を使用）を挿入す。ままた注記を書き込んだ紙片を上欄外に貼附す。朱不審紙の貼附あり。第二冊裏表紙見返に「敬義堂細谷氏／藏書」墨筆書入あり。

本書は、宋末・元初の曾先之が正史のうち『史記』から『新五代史』までの「十七史」に『宋史』を加えた「十八史」を取捨選擇して編纂したもので、史料の價値の低い俗書と評されながらも、多くの故事・逸話を含み、初學者のための入門書として親しまれてきた。もと二卷本であったが、後代の増補を経て、明の陳殷の音釋、劉刻の標題、王逢の點校を附した七卷本が行われた。日本には室町中期に傳來し、中國史の入門書として盛行した。細矢家本は、醫業七世良珉の舊藏書で、正保五年（一六四八）に京都で刊行されたものであり、同版本に早稻田大學圖書

館藏本（リ08_01705）があるが、卷第七第六十丁が版心から切り取られている。

3 子部

a 儒家類

小學六卷 闕卷第一至第五 宋朱熹撰 明陳選句讀 江戸期刊本 一冊【16】

雙邊縦二十・六cm横十五・七cm 無界八行十七字注文小字雙行 雙花魚尾白口 送返縦點

首「小學卷第六／天台陳〈選〉句讀／善行第六〈…〉」。版心題「小學」又卷次・丁次あり。無刊記。題簽題「小學外篇□…」。印記「細矢藏書」墨文長方印。朱墨筆書入、見返下部ノド付近に朱筆にて「細」字あり。不審紙の貼附あり（第九丁表）。

本書は、明の陳選による宋・朱熹撰『小學』に對する注釋書である。『欽定四庫全書總目』子部二儒家類二に「小學集註六卷」として著錄され、内篇四卷（立教、明倫、敬身、稽古）、外篇二卷（嘉言、善行）の計六卷からなる。大和文華館藏本（http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_100174831）は、細矢家本と版式が同一であるが、字様が若干異なり、別版と見られる。同館所藏本の卷首には、成化癸巳（九年、一四七三）陳選「小學句讀序」、淳熙丁未（十四年、一一八七）朱熹「小學序」、「小學題辭」がある。また題簽は「小學外篇句讀」に作ることから、細矢家本の題簽の印刷不鮮明部分は「句讀」である可能性がある。本版には他に寛文五年（一六六五）版、元祿五年（一六九二）版、同七年版、享保十九年（一七三四）版、文政元年（一八一八）版などがある。

4 集部

a 總集類

唐詩選七卷 明李攀龍編選 日本服部元喬考訂 江戸期鈔本 全一冊【17】

無邊縱二十三・二cm 横十六・四cm（書型による） 無界十行十四字 送返點

首李攀龍「唐詩選序」、次服元喬（服部南郭）「附言」、次「目次」、次「唐詩選卷之一／濟南李攀龍編選／五言古／」、以下至卷之七。題簽題「唐詩選」（書貼）。無印。書根及び裏見返下部ノド付近に「細矢氏」墨筆書入あり。各卷第一丁もしくは第二丁の丁表の折り目上部に朱筆で詩體を記して見出しとする。朱筆書入（補訂）あり。「附言」全四丁のうち第四丁を誤って第一丁に綴じる。

本書は、明代に編纂された唐詩の選集で、盛唐の詩を中心に四百六十五首を收録する。明の古文辭派「後七子」の一人李攀龍の編と伝えられるものの、古來眞偽論争がある。『欽定四庫全書總目』集部四十五總集類存目二に著録される。日本では江戸中期の儒者服部南郭（一六八三―一七五九。名元喬、字子遷）の考訂を経て翻刻されて広く普及した。細矢家本も當時流通していた服部南郭考訂本を抄寫したものである。

(二) 準 漢 籍

〔鼈頭〕増續大廣益會玉篇大全十卷首一卷 闕首卷卷第一至第五第六下第八第九 毛利瑚珀著 安永九年大坂大野木市兵衛等據享保二十年刊本重校刊 三冊【18】

左右雙邊縱十九・九cm横十四・五cm（本文縱十五・五cm横九・九cm（七行）。卷第六上第一丁表による） 有界十行（最大）字數不定注文小字雙行字數不定（鼈頭部二十行字數不定。漢字假名まじり文） 無魚尾白口 句送返縱四聲點

首「六畫上」（部首索引）、次「増續大廣益會玉篇大全卷第六（上） 六畫／竹部（下）、以下卷第七第十、卷第十本文末に「此書首尾校正毛利蕃之丞筆著」とあり。無版心題、卷次・丁次あり。版心に魚尾はないが縦一・三cmの墨丁があり、これが版心上部の卷次と下部の丁次の間を、一丁ごとに上から下へと徐々に下がり、十丁目で丁次の真上まで下がって、第十一丁でまた卷次の下に戻る、これを繰り返し、丁次の目安とする。刊記「舊板再治享保廿年乙卯初冬／新校刊布安永九年庚子初冬／浪速書肆 大野木市兵衛／松村九兵衛／淺井徳右衛門／澁川與左衛門／澁川清右衛門／鳥飼市兵衛」／（廣告）（卷第十末）。題簽題「四聲附韻／冠」註補闕／「類」書字義 増續大廣益會玉篇大全」、正方形の紙片に各冊収録の部首索引を印刷した題簽を貼附する。印記「度外」朱文圓印、「領□／堂」朱文方印。書入なし。

本書は、宋の陳彭年等奉勅重修『大廣益會玉篇』（梁の顧野王が編集した部首別字書『玉篇』を増補したもの）に對して、江戸時代前中期の儒者毛利瑚珀（生卒年未詳。字虛白、號貞齋、通稱香之進）が舊本の誤脱を校正し、筆畫順に改めて和訓を附し、『大廣益會玉篇』未載の字を經史・佛典から補つて各畫數の末尾に枠圍みして收載し、他の字書・韻書や經史諸書の引用を鼈頭部（「凡例」に「冠解」という）に注記したものである。初版は元祿五年（二六九二）であり、以後、享保四年（二七一九）、安永九年（一七八〇）、天保六年（一八三五）、嘉永七年（一八五四）、明治三年（一八七〇）、同十年の計七版を數え、明治時代に至るまで大いに流行した。早稻田大學圖書館所藏（古典籍總合データベース http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko31/bunko31_e0853/index.html）の元祿五年版によれば、卷首には元祿四年毛利貞齋編「増續大廣益會玉篇大全／凡例」、「増續大廣益會玉篇大全引用書目」、「四聲附韻字總目錄」、「増續大廣益會玉篇大全首卷／檢字（…）」、「増續大廣益會玉篇大全卷第一 一二畫／一部（…）」がある。細矢家本は、書背に「共十二」と書き入れがあるのによれば、もと十二冊本のうち九冊を闕く。藏書印から醫業七世良珉（號度外）の舊藏書であることがわかる。

（二） 和 書

1 易

八卦祕一卷 宇都宮歡二撰 文化七年源秀男寫本 全一冊【19】

無邊縱二十四・五cm横十七・一cm（書型による） 無界十四行前後字數不定（卦は二三分で一字。漢字假名まじり文） 無點

首「八卦秘」（表紙直書）、次「三乾ハ健也（…）」（全二十三丁）。奥書「文化元（甲子）十月下旬 原本／宇都宮歡二源氏虎／門人某氏所持／同七（丙午）十一月朔旦／源秀男／拜借而寫」（末丁裏）。無印。書入なし。

本書は、易の六十四卦について假名で解説したもので、奥書によれば、文化元年（一八〇四）に「宇都宮歡二源氏虎」なる人物が原本を著し、その門人が所持していたものを、同七年に「源秀男」なる人物が借鈔したものである。

2 字典

譯文筌蹄初編六卷 闕卷第六 荻生雙松口授 釋聖默吉有鄰筆受 〔正徳五年〕刊後修本 五冊【20】

單邊縱十八・八cm横十三・四cm 無界十一行二十二字（漢字假名まじり部分字數不定） 無魚尾白口 送返縱點

首「譯筌初編卷首／徂徠先生口授 武陵 吉有鄰臣哉甫筆受」、次「譯筌初編卷一／目次」、次「譯筌初編卷一／徂徠先生口授 武陵（僧 聖默／吉 有鄰）筆受」、以下至卷五。卷首は「題言十則」・譯準一則・寶永辛卯（八年、一七一二）二月吉有鄰「凡例三則」からなる。各卷卷首に目次あり。見返「徂徠先生祕授／譯筌初編（翻刻／必究）／（略）麗澤堂藏版」、右上に魁星印あり、又「麗澤堂藏版」上に不明朱文長方印あり。版心題「譯文筌蹄」、又卷次・丁次を記す。無刊記。題簽題「譯文筌蹄（初編）」。印記「鍔／鎧」朱文方印。書入なし。

本書は、江戸中期の儒者荻生徂徠（一六六六―一七二八）が生前に刊行した同訓異義の漢字（中國古典語）辭書で、半虚字（形容詞）・虚字（動詞）一千六百七十五個に對し、その語義・用法の違いを解説したもの。刊本には、京都の書肆麗澤堂澤田吉左衛門が正徳四年（一七一四）に卷首および卷第一至第三のみを先行出版した三卷本（三卷本は傳存せず。宮内廳書陵部藏の六卷本の第三卷末に正徳四年の刊記を有する版本が傳わるのみ）と、正徳五年に卷第四至第六を加えた六卷本があり、第六卷の後に正徳乙未（五年）刊記を持つ。これを初刻として、同一の版本を補修した版本があるが、その刊記頁は内容こそ同じものの版本が異なる。その他、寶曆三年（一七五三）「再板」の刊記を持つ澤田吉左衛門自身による重刊本や、その文政八年（一八二五）大坂田中太右衛門修本がある。當初實字と助字を収めた二編を刊行する豫定であったが、徂徠の生前には刊行されず、寫本として傳寫され、寛政八年（一七九六）に三上孝軒（竹里山人）によつて虚字七百五十八個を収めた後編三卷が刊行された。明治四十一年（一九〇八）には『譯文筌蹄初編』と『後編』を合わせて、小泉秀之助校訂による活版の一冊本が東京・須原屋書店から刊行された。細矢家本は、第六冊を闕くため刊記を確認できないが、『荻生徂徠全集』第二卷（みすず書房、一九七四年八月）の戸川芳郎氏「解題・凡例」が指摘する初刻本の特徴を有すること、また、正徳六年刊後修本（『漢語文典叢書』第三卷所収）と同版であり、版面の状態も似通っていることから、正徳五年刊後修本であると見られる。

無邊縱二十三・二cm横十六・七cm 無界十行二十六字前後字數不定 無點

首「訓譯示蒙卷一」以下至卷五。卷三至五助語上中下、各卷卷首に内容目次（「訓譯示蒙卷幾／助語目次」）あり。卷一全十七丁、卷二全十六丁、卷三全二十八丁（うち助語目次第一丁）、卷四全三十二丁（うち助語目次第一至三丁表）、卷五全三十二丁（うち助語目次第一至四丁表）。題簽題「訓譯示蒙」（書貼）。無印。朱筆増補あり。第二至四冊各處に朱筆書入あり。第一冊見返の内側に「點スヘシ就中助語ヲ知ラサレハナラヌ」とあり、その同文が卷一第九丁表第一至二行にある等、間々副葉に本書の書き損じを用いる。第四冊裏見返に「元文戊午仲夏野州尙友齋藏」原本識語あり。第一冊に「覺」と題する文書一枚（縦十五・三cm横二十八・二cm）あり。

本書は、荻生徂徠の没後に、その著『譯文筌蹄初編』（前出）の續編に當たる未刊の稿本を入手した何者かが、徂徠の弟子達に無斷で、かつ徂徠の遺志に反する形で、元文三年（一七三八）に著者名を記さずに刊行したもので、卷一の總論・「朱子註解之定法」、卷二の「文理例」、卷三至五の「助語」（助詞・副詞・接續詞等）からなる。元文三年の刊記を有し、若干字様の異なる三種の版本と、そのいずれかの版本を用いた明和三年（一七六六）修本がある。また、明治十四年（一八八一）大阪篠田正作校訂の銅版本は、明和三年修本に校訂凡例や句讀點・傍點を附して面目を一新したもので、『漢語文典叢書』第一卷に景印された。細矢家本は、第四冊裏見返に「元文戊午仲夏野州尙友齋藏」の原本識語が見られることから、三種の元文三年本のいずれかを底本に書寫したものと見られる。

單邊縱十七・七 cm 横十二・七 cm 無界九行二十字注文小字雙行（漢字假名まじり注文字數不定） 單魚尾白口 送返縱點

首「用字格卷第二目錄／●有字格凡二十二條」、次「新刊校正用字格卷第二／伊藤長胤輯／●以字格凡二十二條」、以下至卷第三下、次「新雕用字格跋／：／享保甲寅端午日／門人津府記室奧田士亨敬誌」（印刷印記「士亨／之印」「字日／嘉甫」）。卷三は上下二卷に分卷し、各卷卷首に目錄あり。版心題「用字格」又卷次・丁次を記す、版心下部に「慥慥齋藏」とあり。刊記「享保歲次甲寅夏五刊板存于古義堂」（卷第三下第四十丁裏）、又「古義／堂藏／板記」朱文方印あり、又「新刻校正每部／有圖書爲記」とあり。第三冊裏見返に「皇和享保十九甲寅夏六月／平安書房 文泉堂林權兵衛發行」とあり。題簽題「新刊用字格」。無印。書入なし。

本書は、江戸前期の儒者伊藤東涯（一六七〇～一七三六。號慥慥齋）が著した漢文（古典中國語）作成のための文法書で、誤用しやすい「字格」（語順の規則）七十四字三百二十三條を収めたもの。その初稿本が改修を経ないままに、元祿十六年（一七〇三）東涯自序を冠し、正徳元年（一七一）に『訓蒙用字格』二卷として刊行されたが、粗惡な盜刻本であつたため、享保十九年（一七三四）に高弟の奧田士亨（一七〇三～八三）が校訂本を刊行した。その後、天明八年（一七八八）にその版木が焼失したため、文泉堂が東涯の子伊藤善韶に校正を求めて寛政四年（一七九二）に重刊した。細矢家本は、そのうち奧田士亨の享保十九年校刊本である。

單邊縱十七・九 cm 横十二・七 cm 無界十八行低二格二十一字（見出字は低格せず。漢字假名まじり文） 單魚尾白口 句送返縱點

首「實字解二編卷之上」／皆川淇園著 男允君猷／阿波 大谷 信一仲篤／遠江 藤田 敏 好古 全／校／時令部」、以下至卷之下。版心題「實字解」又「二編」、又卷次・丁次を記す。無刊記。奥附「文政元年戊寅初冬／皇都書林（御幸町御池下（ル）町）／菱屋孫兵衛」、又販賣書籍廣告七件あり。題簽題「實字解（二編）」。無印。書入なし。

本書は、江戸中期の儒者皆川淇園（一七三四－一八〇七）が漢字（古典中國語）の實字、つまり名詞について解説したもので、卷上時令部四十八字、卷中宮室門上六十一字、卷下宮室門下百字の計二百九字からなる。初編は天文部・地理部・衣飾部の三卷からなり、寛政三年（一七九一）に京都の書肆西村平八・菱屋孫兵衛・風月莊左衛門・村上勘兵衛・島本作十郎の連名で刊行され、二編は享和元年（一八〇一）に京都の書肆五車樓菱屋孫兵衛等によって刊行された。その後、初編・二編を合わせた六冊本が流通し、文政元年（一八一八）、同四年、弘化三年（一八四六）の印本が傳わる。細矢家本は、そのうち文政元年の印本である。

助字詳解三卷 皆川愿著 皆川允中川恪校（文化十年）刊本 全三冊【24】

單邊縱十七・九 cm 横十二・三 cm 無界十六行低二格二十三字（見出字は低格せず。漢字假名まじり文。總論行二十五字） 單魚尾白口 句送返縱點

首「助字詳解／…文化八年（一八一）秋八月／門人能登戸部知底謹識」（印刷印記「空／齋」「知底／之印」。次「助字詳解卷之一目次」、次「助字詳解卷之一／平安 皆川愿伯恭 著／（男）允君猷／門人 中川恪愼卿」（全／校）／總論」、以下至卷之三。各卷卷首に目次あり。版心題「助字詳解」又卷次・丁次を記す。無刊記。題簽題「助字詳解」。印記「細矢藏書」墨文長方印、「惟／直」白文方印。書入なし。

本書は、皆川淇園が漢字（古典中國語）の助字について、豊富な例證をあげて詳細に論じたもので、卷之一は見出十五件（總論、省矣也焉等文字方二件を含む）、卷之二は見出四十二語、卷之三は見出四十八語からなる。淇園の子允と門人の中川恪が校正して、文化十年（一八一三）に京都の書肆出雲寺文治郎・風月庄左衛門によって刊行された。文政元年（一八一八）・弘化三年（一八四八）等の印本がある。細矢家本は、『漢語文典叢書』第一卷所收の文政元年印本よりも早印である。

3 韻書

〔鼈頭〕改正増字以呂波韻二卷即詩聯大成 闕卷上〔清地以立〕撰 元祿十二年池田弄華軒刊書林大坂敦賀屋九兵衛後印本 一冊【25】

單邊縱二十・一 cm 横十四・二 cm（卷下第一丁表による。本文縱十一・四 cm 横十一・四 cm、本文上部の和漢對類縱四・五 cm） 無界十四行十八字注文小字雙行（本文各韻後の異名熟字大意による。本文九行每行七梓、和漢對類十七行八字注文小字雙行、鼈頭部十九行字數不定。本文・鼈頭部は漢字假名まじり文） 無魚尾白口 送返點

首「増字以呂波韻卷之下／字（平 上平 下平）……」（第百五十五丁裏本文末題作「改正増字以呂波韻卷下（大尾）」、次「和語奇字類」、次「世話字」。最終丁（第百七十三丁）末題作「大成詩聯集（大尾）」。版心題「詩綱大成以呂波韻」又『聚分韻略』の韻目（初出の丁のみ）・卷次・丁次あり。なお、卷下第三十丁の丁付を「三十之四十」に作り、次丁を「四十一」に作る。刊記「元祿十二（己卯）年九月吉辰 書林 大坂心齋橋順慶町／敦賀屋九兵衛／池田弄華軒板」（百七十三丁裏）。題簽題「（新版／鼈頭）詩聯大成以呂波韻」。無印。朱墨筆重ね書きによる傍線あり。

本書は、清地以立（肖白亭）が『聚分韻略』『平韻熟字』（平聲の熟語）と「和漢對類」を主體としつつ、和語・奇字異訓・世話字（俗語・口語に當てられた漢字）を加え、元祿當時の和語を幅廣く收集して漢字を當て、俳諧聯句の參考としたものである。「改正増字以呂波韻」を本文とし、本文の各韻ののちに「異名熟字大意」を配し、本文の上欄に「和漢對類」を配し、本文部分と「和漢對類」を圍むように鼈頭部を設け、『聚分韻略』の平韻熟字を擧げる。刊記のうち「書林 大坂心齋橋順慶町／敦賀屋九兵衛」部分は版面の状態から埋め木であることが明瞭であり、實際、もりおか歴史文化館所藏の同書には敦賀屋九兵衛に關する部分がない（國文學研究資料館「日本古典籍總合目錄データベース」(<http://basel.nijl.ac.jp/~tkoten/>)による)。よって、細矢家本は元祿十二年（一六九九）に池田弄華軒より刊行されたのち、版木が大坂の書肆敦賀屋九兵衛に渡って後印されたものとわかる。なお、もりおか歴史文化館藏本には卷首に見返「醫王山臧版／詩聯大成／書林文海堂」、元祿丁丑（十年）清地以立「詩聯大成敘」、「凡例」、「詩聯大成以呂波韻卷之上下目錄」（末題）があり、卷上の卷頭には「改正増字以呂波韻卷上」

とある。

4 歴史

標註日本外史二十二卷 闕卷第一至第三 賴復撰 雲谷任齋校 明治十三年京都賴又二郎據明治十年刊本重刊 十九冊【26】

雙邊縱十八・五cm横十二・七cm（本文縱十四・七cm） 無界十行十九字 無魚尾白口 句送返縱點 首書頭注傍注
首「標註日本外史源氏後記／鎌倉將軍系譜畧／…」、次「標註日本外史卷之四／源氏後記 賴山陽著」賴又二郎標
註圖記／雲谷任齋校／北條氏／…、以下至卷之二十二。第一至三冊闕。又ママ卷首に系譜畧（卷三至七、十至
十三、十五、十八）、卷末に圖記（卷三至五、七、八、十至十三、十五至二十二）・附錄（卷六、十、十一）あり。
版心題「標註日本外史」又卷次・丁次あり。奥附「明治十年七月廿三日 版權免許／同十年十月 出版／同十二年
三月七日 再版御届／同十三年三月 出版／「標註圖記者／兼出版人」京都府平民／賴又二郎／京都府下上京區
第廿二組／新三本木上之町第四百／八拾八番地住」（印記「山紫／水明／□」朱文長方印）、又「發兌／書肆」
大阪東區心齋橋北久太郎町／柳原喜兵衛／全 全安堂寺町／田中太右衛門／全 堺筋博勞町／和田治郎兵衛／全
北濱貳町目／山岸彌平」、又「發賣／書肆」岐阜縣下第一大區一小區／岐阜西材木町二十番地／東崖堂／大阪
府下東區北濱貳町目四十番地／東崖堂／東京府下京橋區桶町壹番地／出店／東崖堂」。題簽題「賴又次郎／標註
圖記」標註日本外史」（書皮あり）。印記「□細谷」朱文圓印、「度外」朱文圓印、「眞金」朱文長方印、「眞」朱文

方印、「□／翠」朱文方印。不審紙および注を書した紙片の貼附あり。書皮書入、朱筆傍點、朱筆傍注、藍筆傍線あり。第七冊裏表紙書皮に「山形横町細谷氏／藏」と鉛筆書入、第九冊裏表紙書皮に「細谷藏書」、第十一冊裏表紙書皮に「細谷俊夫」とそれぞれ墨筆書入、第十六冊裏表紙に「横町細谷氏」墨筆（二部朱筆重ね書き）書入あり。本書は、文政十年（一八二七）に頼山陽（一七八一～一八三二）が著し、幕末の尊王運動にも多大な影響を與えたとされる歴史書『日本外史』に對して、頼山陽の次男頼復（一八二三～一八八九。字士剛、號支峯、通稱復二郎・又次郎）が「標註圖記」を附して刊行したもの。藏書印・書入・不審紙の貼附の狀況から醫業七世良珉、九世眞金と、眞金の子俊夫（細谷良夫研究員の御尊父）と傳えられた近世の細谷家における愛讀書であつたと見られる。初版は明治十年で、細谷家本は同十三年の再版本である。

太閤記二十二卷即豐臣記 闕卷第一至第五 小瀬道喜輯錄 寛永三年跋刊後修本 八冊【27】

單邊縱二十・五 cm 横十五・五 cm（卷第六第二丁表による） 無界十行字數不定 無魚尾白口 句返點 傍訓

首「大閤記卷第六目錄」、次「大閤記卷六 小瀬甫菴道喜輯錄」、以下至卷第二十二、每卷卷首に目錄あり。版心題「大閤記」又卷次・丁次あり。無刊記。題簽題「太閤記」。無印。書入なし。

本書は、安土桃山・江戸前期の儒者で醫家の小瀬道喜（一五六四～一六四〇。號甫庵）が大村由己『天正記』、太田牛一『太閤軍記』、川角三郎左衛門『川角太閤記』等、先行する太閤豐臣秀吉の傳記を集成したもので、卷第一至第十六太閤の正傳、卷第十七關白秀次の事件、卷第十八第十九戰國武將の列傳、卷第二十第二十一元和二年撰

「八物語」三卷（卷第二十に巻上、卷第二十一に巻中下を収録）、卷第二十二雜録からなる。版本には、寛永三年（一六二六）、正保三年（一六四六）、萬治四年（一六六一）、寛文二年（一六六二）等の諸版がある。細矢家本は、早稲田大學圖書館所藏の無刊記本（リ05_12432° http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ri05/ri05_12432/index.html）と同版であるが、第一・二冊（卷第一至第五に相當）を闕く。この早稲田大學圖書館藏本には、卷首に寛永二年「豊臣記自序」「凡例」「或問」「大閣記卷之綱目」「大閣記一之目錄」「豊臣記卷第一 小瀬甫菴道喜輯録／○秀吉公素生／…」、卷末に寛永三年朝山意林菴（一五八九～一六六四。名守愚、法名素心）「跋」があり、いわゆる寛永三年版と見られる。早稲田大學圖書館には、もう一つ同版で後印のリ05_06039 (http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ri05/ri05_06039/index.html) が所藏されている。この版では、確認した限りでは、卷第一第四～七丁が、リ05_12432と別版で、文字に若干の異同があり、卷第二十二第十二丁が同版で補修・埋め木が施されており、かつ寛永三年朝山意林菴跋もないことから、部分的に改版された後修本であることがわかる。細矢家本は卷第一が闕卷であるが、リ05_06039と版面の状態が近く、卷第二十二第十二丁も補修・埋め木が見られ、かつ寛永三年跋がないことから、リ05_06039に近い時期に印刷された寛永三年版の後修本と推測される。

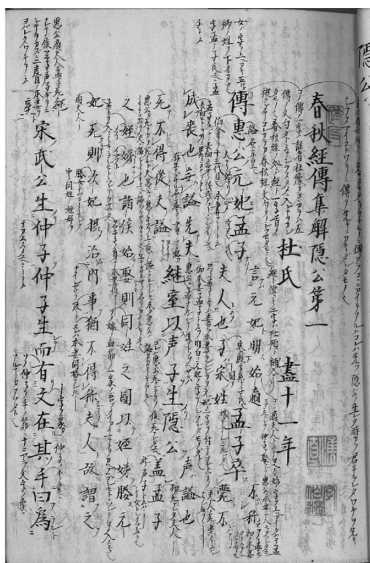
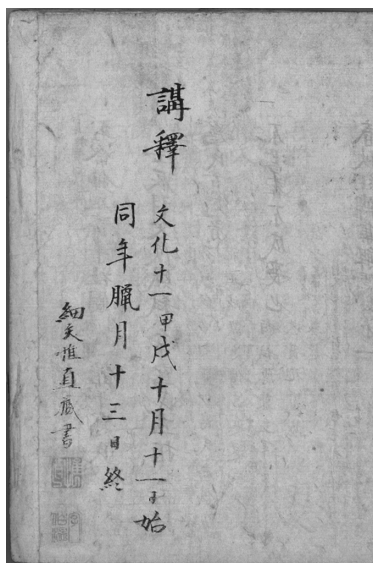
5 藝術

書法羣碎一卷 松下辰著 中井伊兵衛伊藤三郎兵衛校 江戸期據元文四年序戸倉屋喜兵衛刊本藍絲欄寫 全一冊【28】
單邊縱二十・三cm 横十二・五cm 有界八行十八字 單藍魚尾白口 送返縱點 朱句點

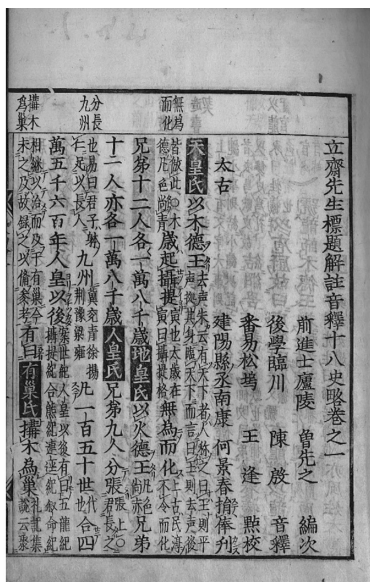
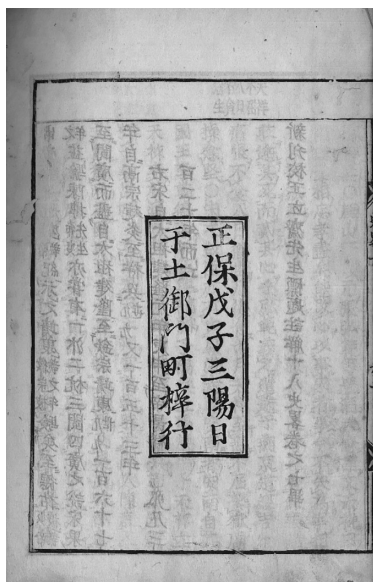
首「題言」…元文己未新正己／東溟野包喬謹識、又「字曰／子羽」「名曰／包喬」書寫印記あり。次「詩」…／右題書法羣碎 高惟馨／龍岡 源友達書、又「子道」書寫印記あり。次「書法羣碎／赤羽 源君岳 著（第二・三行間の界線上にあり）／學書法」、卷末に「井脩興／滕貞景 同校」とあり。次「跋書法羣碎後／…／元文四年正月／江都河保壽拜撰」。版心部分に丁次を記す。原刊記「戸倉屋喜兵衛發行」（跋後）。題簽題「書法羣碎」（書貼）。無印。

本書は、江戸時代中期の書家・儒者の松下烏石（一六九九～一七七九。本姓葛山氏、名辰）によって漢文で著された書論で、學書法・撮筆法・五指法・三腕法・運筆法・大書法・中書法・小書法・結體法・寫字法、および總論からなり、門人中井伊兵衛（井脩興）・伊藤三郎兵衛（滕貞景）が校正して、元文四年（一七三九）の序跋を前後に配して、江戸日本橋の書肆戸倉屋喜兵衛によって刊行された。西川寧編『日本書論集成』第一卷（汲古書院、一九七八年一月）に景印され、北川博邦氏の解題がある。細矢本は、元文四年序戸倉屋喜兵衛刊本を鈔寫したものである。

（公益財団法人東洋文庫研究部主幹研究員）



【09】春秋經傳集解 卷首・奥書



【15】立齋先生標題解註音釋十八史略 卷首・刊記



【24】「細矢藏書」墨文長方印



【11】「細矢藏書」墨文無枠長方印



醫業六世玄俊藏書印

【09】「惟／直」白文方印（上）

「字／伯温」朱文方印（下）



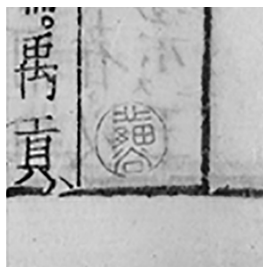
醫業七世良珉藏書印 ※右より順に

【06】「度／外」朱文方印、【08】「度外」朱文小長方印、

【18】「度外」朱文圓印、【26】「度外」朱文圓印



醫業九世眞金藏書印 ※右より順に
 【11】「細眞」朱文圓印、【26】「眞金」朱文長方印、
 【26】「眞」朱文方印



【01】「□細谷」朱文圓印

